談話室

老眼鏡と専門家たち

最近老眼が加速している。細かな文字がダメだ。特に出張先ホテルの薄暗い照明などはいけない。納豆を食べたり目薬をしたり努力はしているのだが，還暦の歳になると現実は残酷である。老眼は加齢による目の水晶体の弾力性低下で網膜に対象像のピントが合わなくなる現象だ。老眼鏡はそれを人工レンズで補正する装置である。初めて老眼鏡で文字を見たときのくっきり感は驚きだった。

私は世の有識者や専門家と呼ばれる人たちを老眼鏡のような役割と思っていた。社会の様々な問題を，その背景や仕掛けから説き起こし，ピントを合わせ鮮明に見せてくれる。TVのニュース番組には必ず「○○に詳しい専門家」が登場し，それらしい解説をする。聞いているといっぱしの気分になり酒屋談義でのウンチクとなる。

しかし，当研究所に来て，農業・農村・協同組合に関する話題でこの種の専門家の話を聞き，時にじかに会う機会も得るにつけ，段々と私は従来の見方を変えざるを得なくなった。彼らは往々にして中立な第三者ではないのである。

注意深くみると二つのタイプがいるようだ。ひとつは知識人，マクロエコノミストらである。彼らは社会のあらゆる事象にコメントする権利と能力，社会を見る「大局感」があると自負している。なかには有識者特有の主観の歪み，思考の弾力性低下，ピントのずれに無自覚な人もいる。彼らは老眼鏡の役割を果たすどころか，自身の老眼の視野で語る。そして多くは現場を知らない。「日本農業はドン詰まりだ」「しかしやる気とやりようで成長産業だ」「既往の農家や団体では先はない」の類をメディアと一緒になって流布する人たちである。

二番目はこの分野の研究者・学者である。彼らは幾何で補助線を引くように，専門的知見とデータ解析を通じて農業問題を解き明かす。しかし最近私は彼らに対してもストレスを感ずる。ひとつのテーマで正反対の分析・結論の専門家がいるのだ。それなのに学者間に論争がない，論点が交わらず，結論は出ない。

今さら聞きづらいが，私は日本の農業が欧米に比べて過保護なのか過小なのか，家族農業は本当に非効率で淘汰されるべきなのか，コメ農家が食っていけるモデルはどのようなものか……こうした基本的なことがさっぱり分かっていない。大半は自分の勉強不足だが，一部は専門家に原因があると思う。

まず，客観性である。どんな現実にも光と影の両面があり，フェアに分析するのが専門家のはずだ。しかしある種の専門家は自説に都合のいい事例，データ，学説を組み合わせ，一面を強調し反面を否定して絵解きをする。「産業政策と地

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/

域政策」「家族経営と企業参入」「職農組合と地域組合」……対立軸を立て「悪いのはあいつだ」という論法だ。過去の農政，農協，競争嫌いの地域共同体。

第二に議論の仕方である。これは最近の農業政策の検討プロセスに原因がありそうだ。同傾向の学者・有識者で組織された政府内検討会を利用して打ち出されるスローガン的見解。異論を持つ学者が外側から個々に散発的反論を放つ。「御用学者」の空中戦，悪罵の応酬。そこには専門家間で議論の末の共通認識はない。

亡き舩橋先生が原子力政策で提起されていた科学的討論の場──政府の枠組条件下での政策協調的専門家による閉鎖的「分立・従属モデル」ではなく，公衆の注視下，多様な見解を持つ専門家による「統合・自立モデル」で──が農業分野でも必要なのではあるまいか。

本当はそうした場で専門家同士，現実の財政や資源の制約を踏まえて，論点を避けずに徹底して議を尽くせばいい。それでもなお見解の相違はあり，集約は難しかろう。しかし学者間で一定の共通理解はできるだろう。

聞けば欧米の農業政策は長時間をかけ，徹底した議論の末に改定されるようだ。イメージ先行での拙速はない。先日私は，中国の政策研究機関との懇親の場で，上司と部下の女性研究者がある品目の保護政策について目前で激しくやりあう光景を目にして，すっかり感心してしまった。検証も実施プロセスもないスローガン的政策は，この白熱する議論に耐えられるであろうか。

一例が，条件のいい平場の農地を国の資金で整備して企業に優先して貸し，その経営が成功したとして，それが何故公共的な農業政策なのか，あるいは農業は消費者のための産業であるから，消費者メリットに一点集中して政策を組み直すことが何故「農業政策の自立」なのか，私の粗雑な頭ではほとんど理解できない。

いけない，かくいう私もお決まりの反論型思考回路に陥っている。

こんな時大切なのは，まずは現場にレンズの焦点を合わせることだ。多様な地域，品目，そして多様な担い手が何に挑戦し，何に悩んでいるか，地域組織はどう支援しているか，そこを凝視すること（当然老眼鏡が必要だ）。その後老眼鏡をはずして，遠くを眺め，目を休めること。過去研究はどうなっている，海外は問題をどう整理している，視野を相対化する「疲れ目」対策である。

視点が合ってくれば，古くなった電池じゃあるまいし，地域農業を外から新しく買ってきて取り換えればいい，風の現実離れした議論が解決ではないことも自明になる。そう，こうした虫瞰的，鳥瞰的視野を提供することこそシンクタンクの役目かもしれない。

いずれにしても私は，もう一段度のすすんだ老眼鏡が必要のようだ。

（（株）農林中金総合研究所 代表取締役社長　古谷周三・ふるや しゅうぞう**）**